LL授業教材の利用開発研究
III　映画とその原作文学作品を使った授業研究

森　豪

A Study of the Use and the Exploitation of LL Educational Materials
III　A Report of the Class for a Movie and Its Original Literary Work

Tsuyoshi MORI

This paper deals with the class in which a movie video titled *The Graduate* and its original literary work are used as English teaching materials for students. The teaching process is as follows. 1. Watching the movie. 2. Hearing test of the scene of the movie. 3. Checking the answer by the movie closed-captioned. 4. Comparing the scene of the movie(of which students take hearing tests) with the expression of that in the literary work. The difference between the expression of the scene in the movie and that of the literature attracts students' curiosity.

The students of this class became much interested in English class which they had not liked at all. The movie which was their most favorite thing invited them to study the scene, and the visual elements helped them to understand. They were conscious of their growth of ability to understand and hear English. Using a movie video with its original literary work for teaching English is one of the most effective and promising ways.

I

ビデオの授業アンケートの学生の回答に,「われわれ映像世代」という言葉があった。確かに彼等は映像世代であり，生まれた時にはすでにテレビが存在し，毎日テレビを見ながら育ったのである。彼等が生まれて以来の時代環境も，視覚への関心を深めてきた。杉山はその視覚への関心の高まりについて「精神のもっとも根源に，視覚による映像があるのではあるまいか。人々が，灯を求める虫のように映像に群がるのは，その具体的な映像こそが，人間の根源的な故郷だからではないであろうか」[1]と言う。言葉や文字のない時代，人間は手振り，身振りで,「かたち」で気持ちを伝え，言葉や文字の発達とともに身振りの表現を止めてしまったが,「かたち」，映像への関心は人間の本質的傾向なのである。だから,「交差点のシグナルに象徴されるように，渡るべきか，止まるべきかを考える努力を止めさせようとする生活感覚が，文字で物語を読む努力よりも，映画館やテレビの前に坐って，ただ前を見るだけで物語を味わわせる方向に向かうのは当然であろう」[2]と杉山は言う。このことから考えれば，学生達のビデオや映画に寄せる関心の高さは当然のことであると言えよう。そしてその関心に合わせて，ビデオや映画を学習に取り入れることも当然であろう。

しかし語学授業では,映像の使用には危険が伴う。言葉や文字の理解がなくても，映像はかなりの程度の理解を可能にするばかりでなく，映像自体を楽しみ，語学学習にならない場合がありうるのである。杉山の言う「ただ前を見るだけ」の状態になる可能

教　養　部

性がある。勿論，語学の重要な目的として異文化理解があり，言葉や文字にこだわらなくても異国の歴史，社会，風俗，習慣，人間，自然を映像だけで理解することが可能で，それも一つの学習法だが，そのような目的も基本的に言葉と文字によって行うのが語学である。映像だけを独立させずに，常に言葉と文字との関わりに於いて映像を使用するのが語学である。そこで本研究では，映画とその原作の文学作品を使用した授業を扱っている。

言葉と文字による語学とは音声言語と文字言語による語学であり，それらと映画の組み合わせによる今回の実験授業は，映画を見ながら，映画の音声言語をヒアリング・ディクテーションによって確かめ，クローズド・キャプションの英語字幕によって文字言語能力を高め，更に原作文学作品の使用によって，文字表現とそれを映画化したものを対照し，理解を深めると共に「読む」面を強化することを狙いとしている。

II

今回の授業で使用した映画は，『卒業』である。原作はCharles Webbの *The Graduate*（1963）で，その学生講読用テキスト（篠崎書林）とシナリオ・テキスト（ＮＣＩ）を使用した。従来，映画に関する講読用テキストはシナリオで，『バルカン超特急』『雨に歌えば』『カサブランカ』（鶴見書店），『第三の男』『素晴らしき哉，人生』（開文社），『テス』（愛育社）などがある。問題は，これらのテキストを使う場合，テキストの訳読が主で，映画ビデオを使っても副次的な使い方しかできず，全体理解のために最初や最後に見せたり，読み終えた部分やこれから読む部分についてビデオで見る程度の使い方しかされなかったことである。この反省に基づいて作られたのが，ＮＣＩテキストで，映画全体のシナリオをテキスト化したうえで，SceneAとSceneBの二部に分け，それぞれを20と15の場面に区切り，各場面毎に白抜きのセリフ部分があり，ヒアリングによって，穴埋めをするようになっている。更に各場面に応じて，「文法練習」，「クラス討論問題」，「暗記のための重要表現」，「語彙練習」，「作文練習」，「代入練習」などの問題が設定されている。そして最大の特色は，映画画面に関する細かな設問が設定されていることである。見て答える問題が設定されていることである。見なければ答えられない。従来の補助的な映像扱いを改める意図をもった部分である。具体例として最初の場面に関する設問に触れておきたい。

映画の最初の場面は，飛行機内の主人公ベンの表情の大写しである。ベンは浮かぬ顔をしている。この部分は原作では，“Then he flew home.”という一行であり，機内の彼についての描写はない。まずこの場面をしっかり見させるため，そして，素地のヒアリング力を試すため，字幕なしビデオを使って，ヒアリング・テストを行った。着地に向かう機内放送は身近なもので，実生活に連なっているので，好材料である。シナリオは，以下のようになっている。

Ladies and gentlemen. We are about to begin our descent into Los Angeles (1). The sound (2) you just heard is the landing gear locking place. The Los Angeles weather is clear (3), temperature 72 (4). We expect to make our 4 hour (5) and 18 minute (6) flight on schedule. We' ve enjoyed having (7) you on board. We (8) look forward to seeing you again in the near future (9).

学生には，下線部分を白抜きにして渡し，回答させた。設問は，名詞，代名詞，形容詞，数詞，動名詞に渡り，多様で，簡単ではない。結果は，クラスA 33名 満点9点 最高8点から最低1点 平均点4.8点（正解率53.3%）満点に近いところは，(1)“Los Angeles”と(4)“72”である。点数の悪いのは，(2)“sound”で，“sun”と答える者が多かった。そして(8)“We”が聞き取れていなかった。まずまずの結果ではないかと思う。尚，試験所要時間は30分である。

この部分についてのＮＣＩテキストの設問は，次のようなものである。（ ）内は答えである。

1. When the scene begins, where is the young man? (airplane)
2. What city is he going? (Los Angeles)
3. How is the weather there? (Fine)
4. Wasn't the trip about four hours? (yes)
5. Did the young man sit by the window or the aisle? (aisle)
6. Do you think he looks nervous, or thoughtful? (thoughtful)

7．He isn't well dressed, is he? (yes)

この設問に対する学生の回答の結果は，クラスＡ36名　満点７点　平均点4.5点（正解率64.3％）であった。採点中に注意を引いたことであるが，(7)の彼が正装しているかどうかは，正装の概念，“well dressed”についてのイメージがかなり作用するように思う。事前の説明が必要である。また(6)“nervous”と“thoughtful”についても，それぞれの単語についての理解に左右されるので，説明が必要であった。しかし語句のイメージで回答できるようにも思う。画面のベンは，イライラしてはいない。この彼の表情は，内容に深く係わっていることだが，直接には，言葉と関係していない。直接的な語学力の判定には関係していないが，内容に係わった彼の表情について，英語で質問し，英語で答えさせることによって，語学の訓練になっている。一見，画面注視力試験のようだが，語学力との係わりはあるのである。尚，質問所要時間は30分であった。

このような画面の映像に関する設問は，映像主体と言う面では効果的である。答えが画面の中にしかなければ，画面に集中するであろう。設問とそれの答えも難しくならないように心掛けられており，内容理解のための訳をする代わりとして使えるものである。

III

映画では，この機内の場面のあと到着後，荷物返還場に向かうベンをカメラが追い，背後にサイモンとガーファンクルの『卒業』というテーマ曲が流れ，タイトル，スタッフ名が現れる。この曲は映画のテーマと深く関係し，この映画のヒットにも深く関係したものであること，そして歌に関する学生の反応を調べるために，まず字幕なしビデオでヒアリング・テストを行った。歌詞は次のようなものである。（スペースの関係で，冒頭と重要部分のみをあげる）

The Sound of Silence
Hello darkness (1), my old friend
I've come to talk (2) with you again,
Because a vision softly creeping
Left its seeds while I was sleeping (3),
And the vision that (4) was planted in my brain
Still remains
Within (5) The sound of Silence.

And in the naked light I saw (11)
Ten thousand people (12), may be more.
People talking (13) without speaking (14),
People hearing (15) without listening (16),
People writing songs (17) that voices never share
And no one dare
Disturb The Sound of Silence.

上記の下線部分についての設問である。設問は多様で多岐に渡り，名詞（抽象，物質名詞），動詞（to不定詞，現在分詞，動名詞，助動詞の後の動詞，命令形，過去形，三人称単数現在形），代名詞，前置詞について質問している。全体的な結果は，クラスＡ33名　満点21点　平均点12.6点（正解率60％）である。顕著なところは，(1)“darkness”の“ｄ”が“ｔ”に聞こえて，ほとんど正解がなかったこと，(11)“saw”は“so”と聞いた者が多かった。成績が良かったのは，(13)(14)(15)(16)の“ing”形であった。聞き慣れた基本的な単語であり，同じ形の繰り返し，主要部分であるための強調した歌い方などの理由によるものであろう。内容に於いてこの部分は中心になるため，学生が聞き取ることができたことは意義深い。

ヒアリング・テストのあと内容理解に入った。学生に指名して，訳詞，解釈をさせたが十分理解できなかったようである。この歌は映画化以前にできた反戦歌であったようだが，それを映画の冒頭に使った監督は，強く歌と映画の内容との関連を意識していたと思われる。歌の中心は，第三連にある。訳せば，次のようになる。

遮るもののない光の中にわたしは見た
一万もの，それ以上もの人々を。
人々は，意識して話すことなく喋りまくり，
人々は，意識して聴くことなくうつろに聞くばかり，
人々は，だれも声に出して歌えない歌を書いている。
そしてだれも沈黙を破ろうとしない。

この「人々」にはコミュニケーションが成立せず，互いに喋りあっているが，互いは本当は沈黙の世界にいるのであり，互いの間に共有されているものはない。コミュニケーション・ギャップがある。そのことに「人々」は気付いていない。互いにギャップ

があるということは，互いの間に沈黙があるということである。「人々」は，互いに喋りあっているので，互いが沈黙の世界にいることを知らない。「お喋り」という「沈黙の音」を破って，真実の声に互いに耳を傾けなければならない。そして真実に目覚めつつある者は，またその騒音の世界が沈黙の世界に聞こえ，コミュニケーションは成立しない。もともとは，反戦の歌で，沈黙せずに，反抗を叫べという意図らしいが，この映画では，以上のように解釈できる。それを具象化した映画画面の一つが，自分のためのパーティでありながら，物質的満足の欲望の虜となり，名利を追う出席者たちの世界に違和感を覚え，仲間入りできず，閉じ籠った自分の部屋の窓から庭にいる客達をベンがガラス越しに見下した場面である。盛んに喋っている客の声が聞こえない。青い光の中の人々は，口をパクパクしているだけである。そしてまた，アクアラングを付けてプールに潜ったベンは，道化であると同時に，沈黙の世界にとりかこまれていることを具象化したものと考えられる。

この歌の部分の歌詞は難解で，解釈が困難な面があり，また歌は，例えばニュースなどの読みに比べて，ヒアリングには難しいけれど，リズムとメロディーによって深く脳裏に印象づけられて，記憶されるという効果があると思われる。理解の困難なところを十分に説明して理解させ，何度も歌わせれば，効果的な一つの学習法となる。

IV

以上の機内の場面，歌の場面をイントロダクションとして，作品の本筋の中に入ることにした。方法として，個々の部分を積み重ねて全体に至るものと，全体の大筋をまず理解させて部分にいく方法が考えられる。個々の部分からいけば，あまりに細かくなり，ばらばらの理解に陥って，興味をなくする危険性が考えられ，また全体から入ると，全体を見てそれで良しということになって，もうすべて理解した気になり，興味をなくす危険性がある。今回は，週一回の授業のため間隔がありすぎ，部分ばかりだと細切れの理解になって，つながりを忘れ，興味を失う危険性を重視して，まず映画全体を見せることにした。映画は，全体で１時間50分で，二回の授業を使うことになった。尚，この映画をすでに見たことのある者は，クラスＡ　33名中２名であった。以外に初見の者が多かった。

映画全体を日本語字幕で見せたあと，アンケートをとった。すべての映画の場面を見ることもできず，原作のすべてのページを読むこともできないから，ポイントを絞る必要があり，その参考にするつもりであった。学生の関心の所在，理解度について知ることもできる。

アンケートは，クラスＡで，まず(1)映画のテーマ(2)映画で印象深かった場面について質問した。結果，テーマに関してはほとんどが「自立」として理解でき，印象深い場面は最後のクライマックス，ベンが教会より花嫁を略奪する場面であった。そして(3)分かりにくかったところ，について質問した。この質問は有効であった。どの点に力点を置いていけばよいのかということを考える時の参考になった。分かりにくかったところでは，主人公ベンの悩み，ベンとロビンソン夫人の結びつき，ロビンソン夫人の人格，エレインの心理の変化，「卒業」の意味，などが多く指摘されていた。これらの部分は，すべて重要部分である。これらが，一回の鑑賞で理解できなかったことは，映画を何度も見ることの必要性，映画だけでなく原作を読んで理解を深める必要性に結びついているように思われる。一回見てすべて終わりということには，ならなかったのである。分らなかった部分が，じっくり映画を見ることによって，また部分部分を確めることによって，さらに原作を読むことによって，分かってくる可能性がある。

映画は秀才ベンが自宅に帰るところより始まる。ベンは悩んでいる。悩むままベンは，学業を放棄し，父親の共同経営者のロビンソン氏の妻のロビンソン夫人と情事を重ねるようになる。そこへ夫人の娘のエレインが帰ってくる。夫人はベンとエレインを近づけまいとするが，二人は寄り添うようになる。夫人とベンの間のことをエレインが知り，去ったエレインをベンは彼女の大学まで追う。大学の近くにベンは住み，エレインに愛を打ち明け，ベンの愛にエレインの心が引き寄せられるようになった頃，ロビンソン夫妻は強引にエレインを他の男と結婚させようとする。それを知ったベンは，エレインの結婚式場の教会に駆け付け，エレインを奪って逃げる。

このような粗筋の中で，確かに学生達が分かりにくかったところこそ，重要な部分であり，そこの不明瞭部分を明瞭にしていくことが，作品理解に至る道であると同時に，授業の方向である。映画も原作も長く，すべてをじっくり見て読むことはできない。

ポイントを絞る必要がある。その絞るポイントは，学生が分かりにくかった部分である。授業では，ポイント部分について，ＮＣＩテキストの白抜きシナリオをコピーして渡し，字幕なし，日本語字幕，英語字幕映画ビデオを使って，ヒアリング・テストを行い，原作テキストを読ませ，ポイント以外は，日本語字幕映画を見るだけで進むようにした。その具体例として次に，学生の最初の疑問点，ベンの悩みとはどういうものなのか，ということに関する授業について述べたい。

V

映画では冒頭のタイトルが消えたあと，ベンの悩みの場面に入り，主人公ベンの部屋の浮かぬ顔をしたベンのアップになる。背後に水槽があり，魚が泳いでいる。父親が呼び掛け，ベンのために開いているパーティーに来てくれた人に挨拶するため，下に降りてくるように言う。以下の言葉が二人の間で交わされる。

Mr. B　Hey, what's the matter? Guests are all downstairs. Ben, waiting to see you.
Ben　Dad, could you explain that I have to be alone for a while?
Mr. B　These are all our good friends, Ben. Most of them have known you since, well, practically since you were born. What is it, Ben?
Ben　I'm just (1)
Mr. B　Worried?
Ben　Well (2)
Mr. B　About what?
Ben　I guess about my future.(3)
Mr. B　What about it?
Ben　I don't know. I want it to be (4)
Mr. B　To be what?
Ben　Different (5)

上記の下線部分についてヒアリング・テストを行った。最初，字幕なし映画で行った。その結果，クラスＡ　39名　満点５点　平均点３点（正解率60％）　注目すべきところは，(3)“I guess about my future.”の正解者が一人であったこと，(4)“I want it to be.”の正解者二人に対し，“I want to be.”の誤答が32人もあったことである。

次にキャプションを使って質問した。学生は，ヒアリングと同時に英語字幕を見て回答できる。この部分は殆どシナリオと英語字幕が一致している。そのため理解し易くなったのか，(4)に一人の誤答があったのみで，全員全問正解であった。クラスＡ　39名　満点５点　平均点4.9点（正解率99％）であった。英語文字があった方が，理解が正解になる。

次いで日本語字幕によって見せた。この部分は日本語字幕がおもしろくなっており，和訳について考えさせるのに好材料だと思ったからである。日本語字幕は次のようになっている。

父　　何だい
ベン　そのー
父　　ちょっと何だい
ベン　将来のことを考えてたんだ。
父　　将来がどうだ。
ベン　よくわかんないよ。いやなんだよ。
父　　何がだ。
ベン　このままじゃ。

英語を念頭に置いて日本語を読むと，日本語訳の苦心が分かる。特に「いやなんだよ……このままじゃ」は，“I want it (future) to be different”の訳であるが，原文を読んで即座に浮かびそうにない，優れた訳である。またベンの“to be”を受けて父親が“To be what?”と言い，更にそれをベンが受けて，“Different”と言う言葉の続き方，英語が会話の中で，話者の間で，互いの言葉に関係しあって会話が続いていくところは，この作品の秀れた，面白い部分で，その点に学生の注意が向かうように説明をした。

この部分は，映画と原作の比較という観点から考えて興味深いところである。原作でも同じように本筋は，父親がベンの部屋に呼びに来るところから始まるが，かなり違っている。部屋から出てこないベンに対し父親が言う“What is it, Ben?”という映画の重要な言葉は原作にもあるけれど，その答えは，原作では“Nothing”であり，映画とは違う。しかし映画の“I guess about my future.”と“I want it to be different”という答えは，原作のこの部分にはないが，原作の別の部分にあり，しかもそれは二ケ所で，それらを映画では合成し，凝縮して，映画の

最初の一場面にしているのである。特に“different”に関して調べると面白い。原作では無理やり下に降ろされてパーティー出席者に挨拶する間に，時を見てベンはまず母親と次いで父親と自分の悩みについて話し合っている。母親との会話は次のようである。

“Ben, what's the trouble,” she said.
“The trouble is I'm trying to get out of this house!”
“But what' on your mind.”
“Different things, Mother.”
“Well, can't you worry about them another time?”
“No.”

“Mother, I'm worried about different things. I'm a little worried about my future.”
“About what you're going to do?”
“That's right.”

ここに“different”と“future”が使われている。映画の“different”とは，意味と用法が違う。映画では，“I want it (future) to be different”であるのに対し，原作では“I'm worried about different things. I'm worried about my future.”である。映画では，この原作の二文を一つの文に凝縮している。ここだけ見れば，映画は原作の母親を父親に変えただけのように見えるが，言葉としては，母親の言葉を映画の父親が使用しているにしても，ベンの悩み自体については，原作でも父親が深く，核心的な部分で係わっている。母親と話したあと，原作では，パーティーの合間にベンは父親と会話をしている。ベンは，すべてが突然グロテスクになってしまったこと，自分のすべての業績や大学で学んだこと，その4年間が無意味に思えること，そのような感じが生じた原因が分らないこと，自分がどうなってしまったのか，なぜこうなったのか一人になって考えたいことなどを，父親に話している。母親との会話に“future”とか“different”のような言葉が出ているが，ベンの悩みの本質的部分は父親との間になされている。

映画が原作を単純に模倣することはできない。原作通りに母親と父親とのベンの会話をそれぞれ描けば，他の肝心な部分が描けなくなる。そこで簡潔な表現で映画は原作を描こうとし，映画の父親の凝縮された言葉になったのであり，この言葉はそれなりに意義深いものである。しかし学生はベンの悩みが十分分からないと言う。その限り，映画は説明不足である。そしてそこにこそ原作を読む価値が出てくるのである。原作を読めばより深く理解出来る。ここに原作を読むことの大きな意義と面白みがある。映画と原作を並列することの面白みであり，学生の興味をかきたて，学生はより興味をもって映画，原作に向かうものと思われる。

VI

ベンの悩みについての理解を深めるために，次に取り上げた部分は，階下に降りたベンとパーティーの来客との応対である。この部分は，原作と比較という面で，興味深い場面である。特にMr. McGuireに関してである。映画では，マグワイアー氏は，ベンとわざわざ二人きりになって，うちあける“Plastics”という言葉によって，いかにこれから儲けられるか，世俗的成功を得ることができるか，その方法についてアドバイスをしている。氏は，世俗的欲望に生きる人間の象徴的人物である。そのような欲望に生きる世界に疑問をもったのが，ベンである。原作を読むとそのあたりがよく理解できる。しかし原作で，ベンと話すのはMrs. McQuire夫人である。夫人はベンの学校での数々の表彰を称えるが，ベンはなぜそんなに自分の表彰がいいものと思うのかと問い掛ける。ベンがそれらを誇りに思わぬことが夫人には不思議であった。なぜ？なぜ？と問い続けるベンに夫人は「何を言おうとしているのまったく分からない」と言い，ベンが更に「僕が何を言おうとしているのか分からないのですね」と念を押すと「分からない」と夫人は答える。お互いに会話が通じない。コミュニケーションが成立していない。沈黙の世界である。物質的欲望の満足を目標に生きるマクワイアー夫人は，ベンの疑問の意味が分からない。映画では，原作のこれらの言葉は使われず，“Plastics”という言葉に凝縮させている。このような原作の表現を説明することによって，学生のベンの悩みについての理解が深まったように思われる。

映画は，ここまで浮かぬ顔のベンと来客を映しながら，水槽を映している。水槽の中にいる魚がベンであり，ベンが父親に従って下に降りてゆく階段にあったピエロの絵のようなピエロがベンであり，パーティーの明くる日，皆に見せるため，父親の買っ

たアクアラングでプールに潜ったベンはまさにピエロであることを暗示している。すべてに疑問を感じたベンは，それまでのピエロ的な自立のない生き方から離脱しようとしているのである。体制に疑問を持ったベンが，体制に溶け込めない，夫婦の間が冷えきった孤独なロビンソン夫人と結びついたのは，自然である。パーティーの時，来客に嫌気がさして二階に戻ったベンのところへ来たロビンソン夫人が，ベンに彼女の家まで車で送るように投げた彼女の車のキィーが，わざとのように水槽の中に投げ込まれ，ベンがそれを取り出すが，それは今迄のベンの水槽の金魚のような生き方が，夫人によって破られ，自立した生き方に向かうことを暗示している。そしてこれらはすべて原作にはない映画独自のもので，映画による原作についての解釈を映像化したものなのである。

Ⅶ

以上のように，ポイントとなる重要部分を中心に，映画をヒアリング・テストを行いながら見て，原作を読む作業を続けた。問題は時間が足らないことであった。理想を言えば，ＮＣＩテキストの文法等の設問もやりたいのであるが，映画と原作の比較という目標のためには，割愛せざるをえなかった。原作を読む部分にしても，映画を見る時間と原作を読む時間を半々に取ると，授業中には学生に全訳をやらせる余裕がない。全訳をやるならレポートにするより方法がない。全訳レポートをやったが，学生の負担はかなり重いものとなった。授業では主要部分を訳したり，文法説明をしたりした。『卒業』に関する限り，原作はかなり読み易いもので，学生が読むのにお手あげの部分はなかったが，完全に読めることはなく，読み，文法に於ける重点部分に絞って，十分説明し，学習させることが大切である。

映画と原作文学作品の比較についてであるが，杉山は詩の翻訳に触れ，忠実な翻訳より誤訳を含んだ優れた詩人の翻訳の面白さを述べて，「映画も，また，そのような意味で，映像に翻訳されて，別種の創作品として見るべきなのである。いたずらに，原作の文学作品と比較，検証することは，あまり意味のない場合が多い。すくなくとも，その作品の価値を品評することにはならないはずである」[3]と言う。確かに映画作品の批評のために比較することは無意味であるが，語学教育のためには，比較，検証が学生をそれぞれの作品に強く引き付ける作用をし，有効であると思われる。映画が原作の解釈であり，意味を教えてくれ，また原作が映画の解釈を助けてくれる。それぞれの言語表現を調べていく間に，言語の理解が深まり，またそれぞれの世界をより深く理解することができる。

映画と原作の比較授業を終わった時，学生に授業についてのアンケートを行った。結果は次のようであった。第２学年３クラス(A，M，K)計112名　数字は人数（　）内は全体に占める割合である。

１．ビデオ授業の印象
　ａ．授業がおもしろく，興味深いものになった
　　はい　86（76.8）　いいえ　3（ 2.7）
　　どちらともいえない　23（20.5）
　ｂ．英語が身近なものになった
　　はい　31（27.7）　いいえ　16（14.3）
　　どちらともいえない　65（58.0）
２．英語力が少しでも向上したと思う
　ａ．内容理解力
　　はい　44（39.3）　いいえ　15（13.4）
　　どちらともいえない　53（47.3）
　ｂ．ヒアリング力
　　はい　64（57.1）　いいえ　11（ 9.8）
　　どちらともいえない　37（33.0）
　ｃ．単語力
　　はい　11（ 9.8）　いいえ　38（33.9）
　　どちらともいえない　63（56.3）
３．英語字幕（キャプション）について
　ａ．読み易かった
　　はい　64（57.1）　いいえ　22（19.6）
　　どちらともいえない　26（23.2）
　ｂ．理解に役に立った
　　はい　96（85.7）　いいえ　1（ 0.9）
　　どちらともいえない　15（13.4）
４．原作を一緒に読むことについて
　ａ．おもしろかった
　　はい　62（55.4）　いいえ　6（ 5.4）
　　どちらともいえない　54（48.2）
　ｂ．理解が深まった
　　はい　85（75.9）　いいえ　3（ 2.7）
　　どちらともいえない　24（21.4）
５．テキスト『卒業』について
　ａ．内容が理解し易かった

はい 68（60.7） いいえ 12（10.7）
どちらともいえない 42（37.5）

b．英語が難解でなかった
はい 47（42.0） いいえ 27（24.1）
どちらともいえない 38（33.9）

6．映画『卒業』について
a．おもしろかった
はい 91（81.3） いいえ 6（ 5.4）
どちらともいえない 15（13.4）

b．内容が理解し易かった
はい 87（77.7） いいえ 5（ 4.5）
どちらともいえない 20（17.9）

c．英語が平易であった
はい 28（25.0） いいえ 21（18.8）
どちらともいえない 63（56.3）

映画ビデオ授業によって「授業がおもしろく，興味深いものになった」と意識的に答えられるのが，80%近くあり，「おもしろくない」のは112人中僅か３人に過ぎなかった。英語自体に興味が生まれたのが27.7%で理想には遠いが，授業にこれだけの者が興味をもって，授業に来るのが楽しくなったのであれば，この授業方式は成功であったと言えると思う。映画ビデオの『卒業』は，「おもしろかった」者81.3%，「内容が理解し易かった」者77.7%，しかし「英語が平易であった」者25.0%，難しかった者18.8%であった。原作については，「おもしろかった」者60.7%，「英語が平易であった」者42.0%で，共に題材としては適当であったと思う。映画と原作文学作品の併用については，「おもしろかった」者55.4%，「理解が深まった」者75.9%で併用がおもしろく，また理解を深めてくれたと言え，授業の意図が満たされたと思う。そして英語字幕（キャプション）については，85.7%の者が「理解に役だった」と受け止めており，この点でもキャプションの有効性が確かめられた。問題は，学生自身がこの授業によって，自分の英語力の向上を意識できたかどうかである。「内容理解力」39.3%，「ヒアリング力」57.1%，「単語力」9.8%である。これは，今回の授業の姿の一面を現している。映画を見る場合にヒアリング・テストを行いながら見ており，ヒアリング力に重点が置かれて，そのような訓練を受けていないと思われる学生には，この訓練によって自分の上達を意識できたのではないかと思う。内容理解力の数字はまずまずだと思うが，単語力は「つかなかった」と意識する者が33.9%あったことは，反省材料である。恐らく学生には自分の語彙を増やしてくれたと思えるような経験が自覚されなかったということであろうが，彼等に語彙の増加を意識させるものとなると，難解な語彙を含むものとなり，理解が困難になる可能性があり，この面は研究をしていかねばならない。

このように問題を含んではいるが，「生徒にとって最適な教育課程を考えてやること」を目指すならば，何よりも「授業がおもしろく，興味深いものになった」と答えた学生が80%近くいたという事実に注目すべきであり，その事実はこのような授業に継続して研究を重ねる価値と義務があることを示しており，今回の実験授業の成果であると思う。

尚，本研究は本学の昭和63年度研究助成を受けたものである。

注

1）杉山平一：映画芸術への招待，12，講談社，東京，1975.
2）同書，13.
3）同書，125.

（受理 平成２年２月20日）